

した。

二人は再度の召集で昌図に居るとのことでした。

その後、第七十二連隊は勃利に移動し、騎兵第七十二連隊は約三年で解散し、南方行きの新しい部隊が編成されたのです。私共三年兵は編成から除かれ内地行きの命令が出ました。静岡の第三連隊にて「三年間御苦勞様」と言われて、満期除隊したのが、昭和十八年二月です。

三年ぶりにて我が家に帰りましたが、私のことを、ことのほか可愛がってくれていた祖母は、三カ月前に亡くなりました。小学校は二年程前に火災で焼け新しい学校となり、三年間の変わり方を痛切に感じました。日増しに戦争も激しくなり、村からの召集兵も多くなりましたが、私には再召集がなく終わりました。

私は、十八年四月から終戦まで、青年学校の指導員を務めました。終戦後は、元第七十二連隊の戦友会が各県持ち回り当番で、二十九回実施され

ております。

また、毎年行われる戦没者の慰霊祭には必ず出席して、亡き戦友のご冥福をお祈りしております。

平成十二（二〇〇〇）年三月六日から四泊五日にて中国の上海、杭州、寧波の旅（戦没者慰霊のお寺行事）をして来ました。

戦争当時の中国は今平和となり、町や村の城壁は取り壊され、農地は国営にて区画整理され、急ピッチに発展しておる姿を見て、戦争の無い平和の有り難さを痛切に感じてまいりました。

激闘 芷江作戦

京都府 山内 勲

私は、京都府船井郡瑞穂町字妙宗寺に、大正十（一九二一）年三月三十一日に生まれました。両親とも健在で土木建設の請負業をやっていた。長男な

ので学校を卒業したら父の職を継ぐところ、農林学校を卒業すると職業軍人を志願したが体重不足のため「第一乙種」になり希望はかなわなかった。兄弟は六人だったが二男、三男は夭折した。

四男が、海軍飛行予科練習生を志願する。私は神戸市役所に職を得て勤めたが、昭和十五（一九四〇）年に兵庫県庁勤務にかわった。

同年五月、徴兵検査の結果「第二乙種」となり補充兵になった。昭和十七年七月召集され、中部第三七部隊（京都伏見）に入隊した。

五カ月間の猛訓練の後、同年十二月末、中支派遣嵐第六二一三部隊に転属になった。嵐第六二一三部隊は歩兵第一〇九連隊の別称で、その第二大隊の第六中隊の要員だった。嵐第六二一三部隊は正規の師団編成であったが乙装備で揚子江（長江）沿岸の警備に専念した。

方家嶺に大隊本部があり第六中隊もそこに駐屯していた。私は歩兵の小銃隊員だったが、昭和十八年の夏に擲弾筒要員に変わった。この頃から装

備も向上し、作戦に参加するようになった。

常徳作戦、貴州作戦に部隊は主力を上げて参加したが、第二大隊は警備部隊として残った。作戦終了後は、訓練と警備の日々が続く。警備部隊もいつの間にか、戦闘部隊になっており、私も伍長に進級した。

いよいよ最後の芷江作戦になる。この作戦には部隊も全力をあげ参加した。芷江作戦は一口に言えば、連続苦戦、損害甚大、戦線離脱、反転と、玉砕寸前の戦いと言えよう。反転作戦中ポツダム宣言受諾になり辛うじて復員することができた。作戦中、初年兵の補充があったが、訓練もできずあまり役に立たなかった。

六十余年前のことであり記憶も薄れ、忘却したところも多いが、第六中隊の死闘を中心に戦友並びに戦史の一部を参考にし、質問に答えたい。

連隊長は第一大隊長に「昭和二十年四月二十六日夜、一部兵力で主洞東南側高地陣地を攻略して

確保せよ」と命じた。第一大隊長は、新たに配属された第六中隊に攻撃を命令した。私は私のいる第六中隊が第一大隊に配属になっていることを知らなかった。後で飯塚大隊の危急増援のため配属されたことを知る。

第六中隊は隊長・梅本豊次郎少尉の指揮により二十六日二十二時頃、僅かな月明かりのもと隠密裡に、夜襲で主洞東南側高地北端重慶軍陣地を攻略するため敵陣地に近づいた。一部少数兵力（軽機一、擲弾筒一、これに伴う各弾薬手、小銃手など七〜八人）でまず敵情偵察に雑木林の暗い急斜面をよじ登った。

残る本隊は「様子は如何に」と固唾をのんで待ち構えている。突如、敵陣の高射砲陣地から待つていたとばかりのチェッコ機銃の猛射と、柄付手榴弾の乱投である。正に雨霰とすさまじい反撃で一時付近は明るくなった。「やられた！ 何も見えない！」と叫んで急斜面を転がり落ちてきた兵がいた。松本幸一上等兵だ。眼をやられたらし

い。ぴたつと乱射もやんだ。誰一人、声もでない。夜襲は不成功に終わった。

今一度迂回して敵の背後高方から強行突撃することになり隠密裡に転進し、二十七日、目的の高地上に到達した。

二十七日十六時頃、装具を頂上に集め、兵器、雑のう、地下足袋の軽装で命令の下るのを待つ。山麓には丈余の雑木が繁っていた。頂上は雑草と疎らな灌木があるのみだった。いよいよ突入の時がきた。橋本中隊長の命令と小隊長の号令で全員一丸となり、ゆるやかな斜面を駆けおりた。岸小隊長は軍刀を抜き、突つ込む。全員、雄叫と共に遮二無二突進する。

途端に今まで影をひそめていた右松林からあの軽快なチェッコ機銃の乱射音、加うるに手榴弾の投擲と破裂音がこここで聞こえた。私も擲弾筒分隊長であるため、遅れないよう遮二無二走った。突然前のめりに転倒する、左脚大腿部に熱いものがぶつかったような感じた。痛みをあまり感

じなかつたので、負傷したとは思わなかつた。直ぐに立ち上がった突進しようとしたが立てない。再三、起き上がろうとしたが激痛がおこつた。足を動かすことができない。「畜生、弾が当たつた」と初めてわかる。右の方でも急に誰かの倒れるのが目撃された。「稲田市次郎兵長だ」一声も残さない壮烈な戦死だつた。

ちようど、前を突進していた六、七人の兵が敵陣に突込み一隅を奪取した。そのため、あれほど激しかったチェッコ機関銃の音も手榴弾の炸裂音も聞こえなくなつた。

そんな中ではつきり岸少尉の絶叫とも思える声が聞こえてきた。「岸少尉は天皇陛下のため、御国のために……死んでいきます」それきり二度と岸少尉の声は聞くことはなかつた。

教科書等で見たり聞いたりしたことはあるが、目撃したのは初めてであつた。はつと我にかえると傷口ふきんがべとべとと生温かく出血している。急いで巻脚絆を取り大腿部付け根を堅く縛つ

た。奥村政也兵長が「おーい！ 弾をくれ」と叫びながら近寄つてきた。早速、小銃の弾と手榴弾一個を渡した。瞬間の会話で小畑七郎伍長が小隊長代理になつたことを知つた。

また、橋本中隊長重傷、渡辺曹長戦死、岡田曹長重傷と中隊幹部は殆ど重傷者ばかりのことが知らされた。奥村伍長は早口で喋ると再び前線に駆けて行つた。

右の林方向からの敵弾もこなくなつた。夕方になりかけたころ山麓からチャルメラを吹きながら喊声と共に敵は逆襲してきたが、陣地まではこなかつた。間を置いて三度逆襲を受けたが昨夜と異なり山頂にいる我が軍は寡兵だったが、その都度よくこれを撃退した。諦めたのか、移動したのか、敵の銃声も途絶えていった。

私も友軍の救護班に收容されてやつと生き返つた心地になつた。收容に来てくれたのは文字金三郎、松木新一の古兵の二人であつた。背負つて

貫つたが足を下げると激痛でたまらなかつた。言
貫銃創のせいと思つた。その内敵の落したパラ
シュートの布切を拾つてきて担架をつくり、モッ
コ担ぎで山の中腹まで下り一休みした。雨が降り
出し真つ暗になつたが、用意してくれた握り飯一
個を食べ、嬉しさと感謝で涙がポロポロ出てき
た。

その夜は、山麓の民家で紀平衛生兵長に注射を
一本打つて貰い休んだ。既に多くの負傷患者が土
間に藁を敷いて横になつて休んでいた。枕元には
オマルまでが用意されていた。

夕方担架で部隊の後を追いかけた。途中、幾度
か敵機の機銃掃射を受けた。敵機のなすまにす
るより仕方がなかつたが幸い私は無事だつた。

一本道の担架上で機銃掃射を受け頭がとんでし
まつた兵もいるとの話も聞いた。行く先き先きで
激しい戦闘が続いており、負傷者が増えていくば
かりであつた。

この頃から部隊は次第に孤立化の様相を深めて
いった。私の属していた第六中隊もその渦中にお
り、何も知ることができなかった。

こんな状況が続く中、五月六日頃、敵中強行突
破して反転することになった。ていのいい退却で
ある。多くの重傷患者を伴い、その困難は眼にみ
えるようである。重傷で身動きのできない兵、恢
復の見込のない患者には暗に自爆をすすめる雰
気もあり、自殺する者もでてきた。

当時、独立山砲隊と行動を共にしていたので詳
細は判らなかつたが、山砲隊から乗馬できる者は
申し出よとの申入れがあつた。幸い私は馬に乗れ
るので以後、馬の世話になつた。

昼間はますます敵機の跳梁が激しくなり、林の
中に隠れ、夜間のみ行動が多くなつた。或る日
の夕方、私一人を山林の凹地に下ろし、独立山砲
の兵は薄暗い林の中に入り、盛んに竹を切ってい
る。竹槍をつくり、今晚、夜襲で砲陣地を奪回す
るのだと、その闘魂はすさまじかつた。約束通り

夜中に迎えにきてくれ、置き去りにされず、ほっとした。

ある時は夜道を迷い夜明けとなってしまった。

全く進みも退くもならぬところで、左は断崖、右は中数メートルの溪流で保津川のような感じの川である。早速下馬し、岩の隙間に身を隠すようにしたが、前後がつまっているので都合よくはいかない。できるだけ岩肌の隙に身を寄せていた。心配していた通り敵機が来襲し機銃掃射を始め、小型爆弾を落して飛び去った。反復攻撃はなかったが大きな損害を受けた。

対岸に貯木場があり、その隙間に爆弾が落ち、川の流れば負傷者の血で紅くなっていた。私の乗っていた馬も後足に破片貫銃創を受け歩けないため、大きな弾薬馬と交換し少しずつ進むことにした。それ以降敵機も現れず、止まったり進んだりの遅々とした進行であった。山砲隊の分隊長は度々隊列の見回りにきて、名も知らない他隊

のしかも下級兵である小生のことを、班長さんの水は班長さんに飯をと親切に面倒をみてくれた。感謝感激で胸がいっぱいだった。

以来約一カ月、敵中を反転しながら蜜柑畠のある部落に着いた。そこで分隊長は私を馬から下ろし、話す間もなく次の任務に出発された。

部隊名、氏名さえ聞かず別れたのは、今となって悔やまれてならない。戦後ある戦史を読み、独立山砲兵第二連隊第一大隊長平原大尉であることを知り、改めて尊敬と感謝の念を深くした。

昭和二十一年七月十五日に上海―佐世保と復員し、三宮の町役場に四年間勤めた。結婚して父の職を継ぎ、土木請負の仕事で生計を立てた。現在、二人の子と孫四人に恵まれ平穩に暮らしている。

今も五年に一回全国的な慰霊祭を靖国神社で行っており、京都では、毎年、慰霊祭と戦友会を行っている。

また「一〇九連隊会報」を発行し、親睦を計っている。会報が縁で生命の恩人、当時の独立山砲第二二連隊第一大隊長平原大尉から丁寧なお電話を頂き恐縮し感激した。

私は今、細々ながら平和で元気に暮らしているが、遠く雪峰山系奥深く散華された英霊の冥福を朝夕、祈っている。

常德作戦

愛知県 熊本久夫

私は、大正十一（一九二二）年三月三日名古屋市昭和区曙町で生まれました。

昭和十八（一九四三）年二月十日、福井県鯖江の歩兵第二十八連隊へ入隊、約一週間経て列車で下関、釜山、朝鮮、満州、山海関、徐州、蚌埠を経て盧州へ到着、この地で一期の教育を受けました。

二月十日鯖江へ入隊する当時の私の家族は

父 健在 無職

母 〃 〃

本人 〃（養子）名古屋の航空機製作所勤務

ということでした。

入隊の日は町内のお宮さんへ集まり（同じ学区で二人）ました。家を出る時父は「身に気をつけて頑張れ！」との短い挨拶でした。母はただ黙ってハンカチをあてた目を半分私に向けていました。

駅までの道中は在郷軍人会、婦人会、町内有志、学童に見送られて、日の丸の旗の波に励まされて車中の人となりました。

私の従軍期間約三カ年余り、支那大陸戦線での労苦の最たるものを回顧すると、やはり「常德作戦」に尽きると思います。とにかく在支米空軍に制空権を完全にとられ、昼間の行動は百パーセント不能、夜間行動を終始つづけ、疲労は極度以上